

岩木山麓の大森勝山遺跡で発見した

大豎穴住居址

村越 漢

一、はしがき

産業開発特別地域として、昭和三二年から開発の実施計画が行われている岩木山麓四二、〇〇〇アールにわたる地域は、いよ／＼昭和三五年下半期から機械開墾がはじられること、殊にこの地域は、従来から郷土史研究家諸氏によつて、多くの遺跡が発見され、また地を好事家の絶好な発掘場所でもあ

昭和三三年、これらの遺跡を開墾以前に出来る限り調査しようと、県内文化財諸団体の請願もあつて、弘前市教育委員会内に岩木山麓埋蔵文化財緊急調査特別委員会が設置され、あらゆる機能を挙げ、湮滅に瀕する該地域を調査することになり、昨昭和三三年から三ヶ年計画で実施している。

この論考も以上の目的で発掘調査した大森勝山遺跡の豎穴住居址に關する概要であつて、最終報告ではない。

発掘によつて出土した遺物は、弘前大学教育学部社会第四(考古学)研究室に置かれ、筆者の下で整理が進められている。

二、位置

弘前市の西北約一四料に大森という部落がある。そこからの岩木山へむかつて二料ほど進むと、頂上に三角点のある手白森山へ達する。遺跡はこの山の南に位置する台地上にあり、行政区域は弘前市大字大森(合併前は青森県中津軽郡福野村大字大森)宇勝山という地域に所在する。

昭和二八年郷土史研究家の成田末五郎、戸沢武比が、当地区の遺跡を踏査中に発見し、この場所が大きく竈鉢状にくぼんでいたところから、堅穴であるとの見当をつけていたらしい。

ものとも東北北端の青森県辺りでは、土師器を出土する堅穴住居址が埋まり切らずに、あたかも竈鉢の如き形状を呈するのが普通のようにある。したがってこの堅穴も規模が余り大きなため、土師器における堅穴のような様相をしめしていたのであろう。

発掘した堅穴の所在する台地は、岩木山にその源を発する大石川と、これの分流である大森川とに挟まれた舌状台地で、西南から東北へ延びており、海拔一四六米である。

三、発掘の経過

昭和三四年八月一八日から、岩木山麓調査の一項目として、当遺跡を選び発掘を開始した。

まず南より東へ七六度振れて、堅穴を縦断する長さ二五米、巾一、五〇米のAトレンチを設定し、

これを西方より記録と出土遺物整理の便宜から、五米ずつ五区に分けて掘下れを行った。その結果トレンチ内の層は次のようであった。

第一層 表土（黒色腐植土層）約三四厘

第二層 暗褐色土層 約一五厘

第三層 灰褐色粘土質土層

右の層はいずれもトレンチの第二区で計つた数字であるが、発掘前の堅穴が竈鉢状にくぼんでいたので、周壁に近付けは第一、第二層は厚くなり、また逆に中央部の方は薄くなる。さらに周壁近くの第二層内には、可成りの黄色軽石層が部分的に観察された。最下層の灰褐色粘土質土層は、グリスであり、堅穴はこの層を掘下けて築造したもので、この場合は床面である。

続いて調査の便宜上、堅穴内部をBからEまで二五区画に分け、完掘するまで雨天を除き、一五日の長期にわたって作業を実施し、九月五日ようやく終了した。

四、堅穴住居址の構造

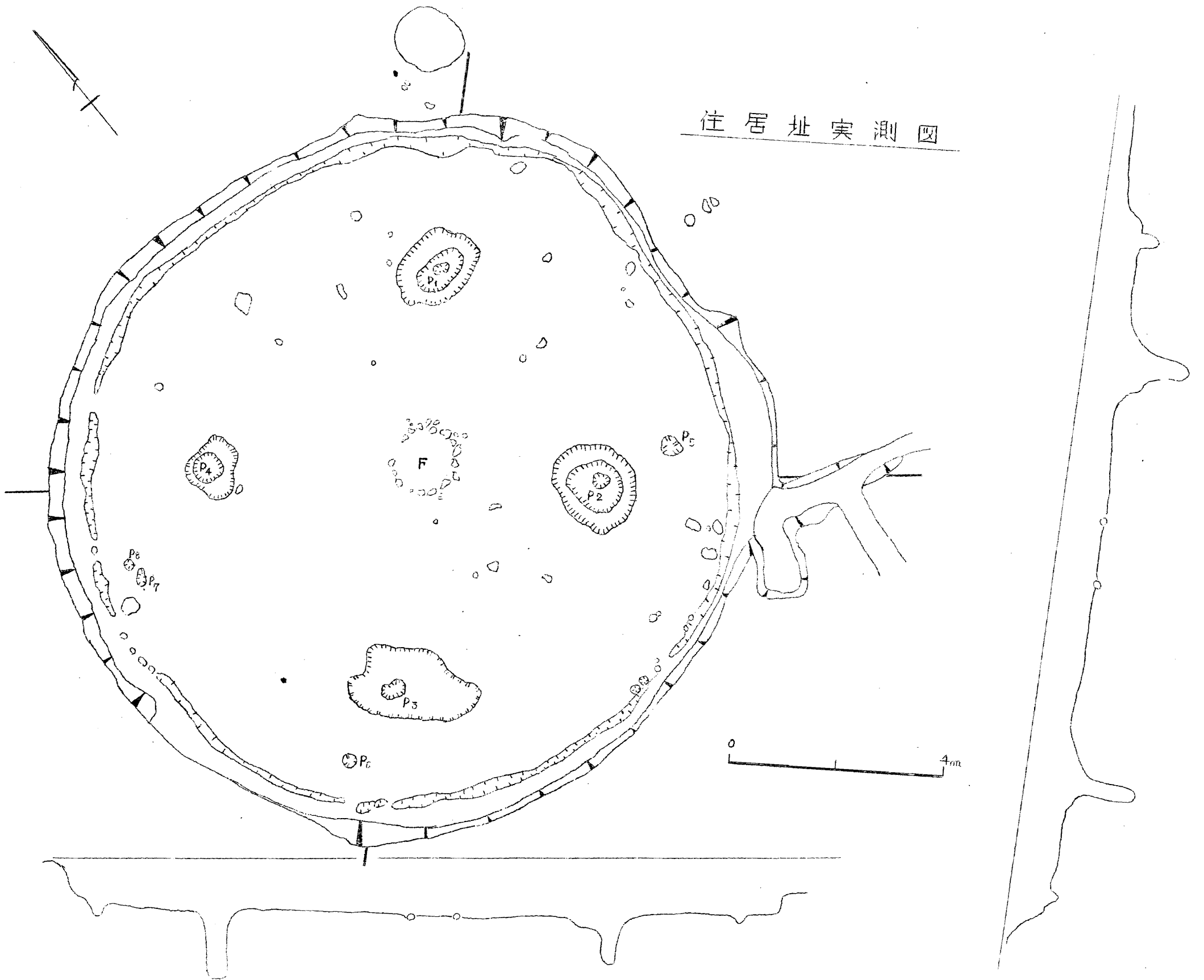
住居址は実測図でみる如く、不整な楕円のプランをもち、三の項で記載してあるように、第三層を約五六糎掘り込んで築造している。

大きさは、周壁上部で計ったところ、もつとも長い個所で一三、七七米、周壁の下は一三、二二米あり、逆に短いところの径は周壁上部で一二、八〇米、下部で一三、二二米あった。また周壁より若干炉へ寄つた個所にみられる周溝の如きものの径を計ると、長いところで一三、五九米、短いところで一、五六米あった。したがつて、住居址の面積は一五〇、四平方米あり、周溝のようなものの内部だけでも一三、六平方米を計ることが出来た。しかし炉址、柱穴等、実際人間の居住不可能な個所が二〇、二平方米あるので、實質的には一三〇、二平方米になるであらう。これを従来使われた坪数であらわすと、全体が三七、六坪、周溝のようなものの内部が二八、四坪、居住不可能な個所が五、〇四坪となり、實質的に使われた住居址の面積は三二、五六坪である。この他、次のような見方もある。詳細は後述するが、周溝の

如きものと周壁の向には人が住のまいと仮定して、それ以外の住める部分の面積は、五三、四平方米、坪数二三、三六坪である。

周壁は西側に垂直の部分のみで、他はすべて傾斜し、西側ある個所では逆に上部が内側へ張り出してゐた。周壁の高さは約五六糎平均あり、住居址を築造した当時は地表面が平坦でなかつたと想像されるので、実測図のセクションにあつたような不均衡の高低をしのぐものと考えられる。しかし西側の周壁外には、灰褐色粘土質土を可成りの厚さに積んだ形跡が認められ、それと共に周壁も、他の個所より高く、現地形も同地点が広い部分にわたつて高く認められるので、おそらく住居址築造の際に内部の土を捨てた場所ではなからうかと想像する。

住居址内部の周溝のようなものは、五ヶ処にわたつて切れており、また西や南側において直径一〇、一五糎、深さ一〇、二〇糎程の小穴となつてゐる。したがつて、周溝というよりも杭を向隔なしに打つた杭列、あるいは柵列の如きものではな



四測實址居住

かろうか、巾の広いところで四一櫃、狭い部分は四櫃、深さ平均二八櫃あった。

炉址は中央部より若干東南にずれてのくられ、整穴に比例して大きく、その径は東西一、四〇米南北一、三五米を計った。大小二四個の石で楕円形に構築し、東北の部分が主となる焚口のように石がない。石の中側および炉の中は赤く焼けており、中心部を西北から東南へかけて、焼土の厚さを計ったところ、その中心部で一五櫃あった。

柱穴は床面に大きな主柱穴と思われるもの四、小柱穴が四、周壁に掘り込まれた小柱穴七、計一五ある。その計測値は下段の表のようである。

右の柱穴で特記すべきことは、P4から直径三〇櫃程度の石と、菱形土器が一個分出土したことである。土器は約六〇度傾斜して埋まっております。その上約一〇櫃に石があたかも土器を保護するよくな状態で発見された。この土器を取り出すために柱穴を掘抜けた結果、表の如き径を計ったが、実際には二五櫃内外であつたと考へてゐる。なお実測図には主柱穴の周辺が大きく、くぼんでゐる

主柱穴番号	巾	深さ
P1	二〇×二〇櫃	一、二四米
P2	二六×三〇〃	九六櫃
P3	二七×四二〃	一、二六米
P4	五九×七五〃	一、三一〃

床面柱穴番号	巾	深さ
P5	三八×四六櫃	二六櫃
P6	二二×二五〃	一八〃
P7	二七×四二〃	三二〃
P8	二五×二五〃	二一〃

ように表現されてある。これはその部分に暗褐色土が入り込んでいたためである。おそらく主柱を埋める際に、道具の幼稚な住居址築造の人々は、可成り大きく廻りから掘つて柱を建て、掘りくほめたところへ他の土を充填したものであろう。P5は西から東へ四〇度振れた方向に口を開き、床面の内部へ一九度の傾斜が入っていた。周壁に掘り込まれた小柱穴は、直径五櫃程度のもので、すべて北東周壁にあり、四六度の角度と約一櫃の深さ

をものっていた。

床面は凸凹がはげしく、北半の部分が堅くしまつていたが、他はやわらかく、全体をみるに炉址へむかつて傾斜していた。この他発掘中に気付いたのであるが、P3の周辺に厚さ約三種の灰と炭が、可成りの広さに分布していた。

以上が住居址のあらましである。発掘中、東南の壁に出入口のような遺構を見付けたが（実測図参照）、第二次調査の際にこれを延長あるいは横断したところ、後世の築造の如く思われた。戸沢氏の意見にしたがえば、旧帝国陸軍が当地城を演習場に使ったとのこと、おそらくその塹壕址であろうか、もう一〇榎余り深く掘れば住居址の床面も前られてしまったであろう。

五、遺物

発掘によつて竪穴内部から出土した遺物は次のものである。

A、石器

有茎石鏃 八、石七（横形）一〇、

石 錐 一、石剣破片 二、

石刀破片 一、石皿（破片二）三、

磨製石斧 一、磨石 五、

敲石 一、異形石器（碧玉製）二、

であった。その他、直径五、五〜八種、厚さ二、

五〜三種程の、両面を平めに磨り、側面を打欠いて円形にした石が六〇余個、主として竪穴の西半

と、西側周壁外から発見された。

B、土器

復元可能の土器と完形土器は、

深鉢（完形一）八、甕形土器 一、

壺（完形二）五、盤形土器 二、

台付土器 五、

である。以上の他、多数の土器破片が発見されて

おり、その主なものを記すと注口土器四、朱塗土

器二、を数えることが出来る。

C、その他の遺物

土偶の足 一、土版破片 一、

滑車形耳飾 一、異形土製品 一、

酸化鉄塊 一、種子（未鑑定）若干、

であつた。これらの遺物は未整理のため、論考は次の機会まで保留したい。なお発掘中の所見と、整理された二、三の土器は縄文晩期初頭の、大洞BおよびB₁式である。その他に、大量の粗製土器があつて、そのなかには昨年調査した湯ノ沢遺跡で発見されたような、後期の特徴をもつものもある。その他の型式に属する土器片は、住居址の東南間壁外に前期末の円筒下層₁式土器が一個体分出したのみである。

六、考察

大森勝山遺跡で発掘した住居址は、現在まで報告されている限り、日本最大といえよう。いままでの巨大なものとしては、埼玉県真福寺遺跡で現同志社大学教授酒詰伸男氏等が発掘され、一辺の長さ一〇米もの方形で、面積一〇〇平方米の竪穴住居址をあけることが出来る。しかし最近この住居址に關して、「真福寺の巨大な住居址の再検討」なる論文が塚田老君によつて発表され、¹⁾柱穴よりみて二つの方形住居址が重複しているとの意

見が出され、マンモ₂住居址も実は一辺約七米、面積約五〇平方米と縮小されてしまった。もつとも縮小されないとの仮定にたつても、一〇〇平方米に対して、大森勝山の場合は一五〇、四平方米であるから、五〇、四平方面積大きいことになる。この他、神奈川県中郡伊勢原町の八幡台で、石野瑛、赤窪直志の両氏が縄文後期の堀之内式に属する敷石住居址を発掘されている。東西一一、五米、南北八、五米の径をもつという。²⁾敷石住居址であるから竪穴とは異なるが、住居址という概念で見れば含むことも出来よう。それにしても大森勝山には及ばない。

普通縄文時代の竪穴住居址は、早、前期が長方形（八戸市十日市赤御堂貝塚の如く早期）をなし、中期では円形または楕円形になり、後期に入ると方形あるいは長方形となるような変遷をしのす。真福寺の場合は、晩期のものであるから最後は方形で終熄したと考之られている。だが青森県の場合、後期後半頃は円形あるいは楕円形のものである。昨年湯ノ沢遺跡で発掘した後期（関東の加賀₁式B₁式に比

（定さ）の住居址は、五、四〇×五、一〇米と四、八三×四、六五米の楕円形ヲランゴあった。⁽³⁾以上述べた早期から晩期までの住居址は、規模の大きなものでもせい／＼とないしと、五米程度で、八米を越えるというのではない。したがって大森勝山で発掘した住居址は最大であるということが出来る。

発掘中、柱穴が発見されるまでは巨大なために、屋根を葺いたとは考之なかつた。屋根はなく、炉を囲んでなにかを議す集会所か、あるいは祭祀場の如きものとの観念にたつていたが、作業の進展につれて、住居址のような構造をしめしたため、そのように思わざるを得なくなつた。

この巨大な住居址に屋根を葺いた場合、どのような形状をなすか検討してみた。その結果、平面形が楕円である点より円錐形の屋根を想像した。もし仮にこの考之が正しいものであるとすれば、住居址周壁上の直径を一四米として葺いた屋根の高さは次表のようになる。

勾配	高さ	勾配	高さ
四寸	三、四米	四五度	七、六四米
五寸	四、一〇	五〇度	八、九七

右表の四寸、五寸とは大工の常用数字で、一尺進んで四寸あるいは五寸上るといふ意味である。しかし若木山麓の如き、多雪で風の強いところでは、四、五寸の勾配で葺いたとしても、前者の重みで潰れてしまふであろう。したがつても、とも受当な勾配は、五〇度では約八米あつて高すぎるし、四五度の七、六四米程度と考之られる。

当地の凡向は、東南へ一、二、五料距つた南津輕郡藤崎町と、四、五南の弘前市殊生部落における最近二ヶ年の観測記録を参考としてみると、藤崎では春WとN、夏NとW、秋S、冬WとSの凡向が多く、殊生は春S、夏SとE、秋SW、冬SWになる。藤崎は平野部に所在し、殊生は若木山の東麓にあるため、はたして大森勝山をみる場合、正確とはいえないであろうが、大体向地の中間として合は考えてみると、春NWとS、夏はあらゆる凡向、秋WとS、冬WとSになる。したがつて一年を通じ、

Wの風が多く、この付近特有の岩木皮に絶えずなやまされていたと思われ、住居址に住んだ人々も西壁外に築造の際、排出した土を盛って冷風を防いだものである。如何なる目的で西壁外にのみ排土したかは、以上より考へると理解出来る。

またさきの高さ七、六四米で、四五度勾配の屋根とすれば、その支柱は長さ次のようになるであらう。

柱穴番号	長さ	柱穴番号	長さ
P 1	四、七九米	P 2	五、一五米
P 3	四、九九〇	P 4	五、三六〇

しかしこれは柱穴の底から計つた概数であつて、床面から見た場合には、柱穴の深さとそれ／＼もつとも近い周壁の高さを引けばよい。その数値は
P 1 二、八五米 P 2 三、四七米
P 3 三、〇八〇 P 4 三、一三〇
となる。

次に住居址外の遺構であるが、北東および東側で発見された・小竪穴で計四つある。直径一、一五〇二、一五米、深さ三〇〇七〇程のもの、

直径九五種、深さ約二〇種の小さなものに分けられる。しかしいづれも人が居住するには小さく適当と思われないので、昨年調査した湯ノ沢遺跡の如き住居址に属する貯蔵庫、あるいは貯蔵穴であらうと考へる。

遺物は前記したようなものであるが、その中で特色ある円盤状の石について述べてみたい。八幡一郎先生は、獲物を捕える際の投石ではなからうかといわれた。しかし発掘中に北西側の床面で、六個積み重ねたものが採られたような状態で出土したため、なにか宗教的な、あるいは他の用途に使用された如き感をうける。如何なる目的のために製作したものであらうか。

最後に住居址の年代であるが、床面から発見された土器は三型式にわたっており、縄文後期終末の粗製に含まれる土器破片から、晩期初頭の大洞B式およびB C式の精製土器と、粗製土器破片が認められた。したがつてこの住居址は、後期終末から晩期初頭の頃に築造され、かつ使用されたものと思ふ。しかし遺物整理が進めば、また新しい

事実が発見される可能性も付記しておく。

七、むすび

二年目の岩木山麓調査も、本年十月三十一日をもつて終了した。現在まで確認された四遺跡の約三分之一弱を終えたのである。

明年は最後の年になるので、より一層の努力と、成果をあけたいと考えている。

大森勝山遺跡の発掘調査は、青森県文化財専門委員成田末五郎氏、弘前考古学研究会戸沢武氏と、筆者の三名が担当し、それに東京大学東洋文化研究所員渡辺兼庸君、弘前考古学研究会員田村誠一君らの補助があつた。その他、文化財保護委員会の有藤忠博士、東京大学講師八幡一郎先生、成城大学講師今井富士雄氏の御指導と、弘前大学教育学部正史専攻の学生諸君、成城学園中学校教諭若菜伊奈緒君の御協力によつて成果を収めることが出来た。これら諸氏と、種々調査の便宜をお計り下さつた方々に対し、厚くお礼申上げたい。

なおこの遺跡は十月一日より三十一日まで、住

居址に続く台地を発掘し、集落あるいは部落の如き形態まで把握しようとの野心をもつて、第二次調査を実施した所、残念ながら目的達成にはいたらなかつた。しかし、台地の東北端で無土器時代のナイフフレイド八点、スレーバー二点を発見し、さらに多くの縄文後、晩期の遺物を掘出し、可成りの成果をあけることが出来た。これに關しては次の機会にゆずりたいと思う。

註一 考古学手帖 昭和三四年六月

2 後藤守一 「上古時代の住居」一—三頁

3 拙稿 「岩木山麓古代遺跡」弘前市教育

委員会 昭和三四年三月

4 同右

(昭和三四年一月一—八日終了)